

## 連載

### 花山天文台今昔【1】花山道路 — その1 —

黒河宏企（花山星空ネットワーク）

先日花山天文台の林の中で雉の声を聞いた。「ケン」「ケン」と確かに二度鳴いたのである。その声は40年前のある情景を私に思い出させてくれました。当時は別館の隣に木造の宿舎があって、その裏の畑に時々雉が姿を見せていたのです。下の写真は食事を作ってくれていた稲田のおっちゃんが餌付けをした「どう猛な」雉です。「どう猛な」というのは本当にそうで、私はこの雉に追いかけられたのです。稲田のおっちゃんが休みのときに、代わりに餌を手のひらに載せて、子どものころに飼っていた伝書鳩と同じように親愛の情を示そうとしたのですが、それは全く裏切られてしまいました。近寄ってきた雉は突如羽で手から餌を叩き落としました。不意を



突かれて思わず敵に後ろを見せましたが、なお追っかけて来るので台所に逃げ込みました。それでもなんと冷蔵庫の横まで来たので、床を足でどんと叩いて反撃しますと、さすがにむこうもびっくり

りしてそこから退散して行ったのです。なるほど桃太郎が家来にしただけのことはあるなと思ったものでした。

花山天文台の名物は昔から百足と蕨蚊ですが、最近増えたものとしては高砂ゆりとカラスを上げることができるでしょう。姿は見えないのですが鶯の声も以前に較べて長く聞かれるようになったような気がします。桜の頃から蝉が喧しくなるまでの間、ホトトギスとの声くらべが楽しめます。

このように、花山では耳を澄ませば、或いは立ち止まって近づいて見れば、四季折々のさまざまな生きものに出会うことができます。若い時は花に見とれる余裕も必要もなかったのかも知れませんが、最近になってこのようなことにも時間を割いてみようと思うようになってきました。

花山天文台の創立は 1929 年ですから、今年で数えの 80 歳、傘寿を迎えることになります。この機会に、花山天文台の施設や設備について、そこに残された記録や写真と先輩の方々から聞いた話などを織りまぜて紹介したいと思います。

私が最初にここに上がってきたのは、大学院に入った 1965 年の春ですから、43 年も前のことです。この間、いざなぎ景気、オイルショック、バブル崩壊などを経て世の中の変わりようは大変なものですが、天文台の施設や設備も大小取り混ぜて、すべての設備が変化して来たといえると思います。変わらないのはザウトリウス望遠鏡の 18cm レンズくらいなものでしょうか。このザウトリウスにしても、望遠鏡システムとしての機能は色々と変身を遂げています。1910 年のハレー彗星回帰に際して購入されたもので、今では 100 歳近い古武士なのです。「色収差の少ない良いレンズやったんやけれど、1955 年のセイロン島の皆既日食へ持って行った時に縁の一部が欠けてね」という昔話を聞いたことがあります。手軽に惑星や月を楽しめるので、つい最近まで夜の望遠鏡として重宝がられてきました。現在では H $\alpha$  リオフィルターと CCD カメラやコンピューターなどの先端機器を装備した太陽彩層フレア望遠鏡として、晴れば必ず太陽を追っかけて貴重なデータを蓄積している働き者です。このザウトリウス望遠鏡については、いつかまた後の号で改めて詳しく紹介したいと思っています。こんな風に天文台設備の変化を次世代の人たちに語り伝えることも、この小稿を書き始めた動機のひとつです。

大きく変わったものの一つは東山ドライブウエーから天文台への入り口です。私が天文台に通い始めた 1965 年頃の東山ドライブウエーは日本道路公園の有料道路でした。天文台関係者の車には通行証が配られてそれを見せて通りました。また、その頃は本数は少ないものの三条京阪から將軍塚行き市バスが通っていました。乗客はひとりの時が多かったように思います。こんなこともありました。ある日天文台前でバスを降りようとする、車掌さんがお金は要らないと云うのです。見るとそれは下宿の隣の娘

さんだったのですが、何とものどかな時代でした。ただ残念ながら、私の無賃乗車がひびいたわけでもなかったのでしょうか、それからしばらくしてこの路線は廃止になってしまいました。

東山ドライブウエーからはずれて天文台へ向かう昔の道は、今は普通の車では通れませんが私の自転車の通り道です。冒頭に書いた雉の声もここで聞いたのです。ここを再び通り始めてから間もなく2年になりますが、2



～3回阿含宗の作業車が来たのと、毎朝山科と將軍塚の間を散歩しておられるらしいかなり年配のご婦人にときどき出くわす以外は、めったに誰にも会いません。

写真は落ち葉のじゅうたんを敷きつめた冬の情景です。このじゅうたんは、梅雨の雨にうたれて次第に腐葉土となって草木の根に戻りますが、秋のどんぐりが弾けたあと、北風によってまた新たな落ち葉が元通りにきれいに敷き詰められます。自然の輪廻を感じさせる花山道です。

銀輪に　どんぐり弾ける　花山道